

松類樹皮下の昆虫群の活動消長に関する研究 (第X報)

— *Monochamus alterutus* HOPE (マツノ  
マダラカミキリ) の発生消長と誘引について —

鹿児島大学教育学部 石 窪 繁  
細 山 田 三 郎

I 緒 言

前報(3)に引き続き、松類穿孔虫で問題になっているマツノマダラカミキリの発生消長を黒松とテーダ松について調査した。なお黒松の餌木を設定して、それに誘引される個体群を検討したのでその一部を報告する。

II 調査方法

A) 被害木の黒松は未だ微害地といわれる指宿郡頰娃地区より6本採取した。樹令約18年、樹高7~8m、胸高直径8~11cm、約1m<sup>3</sup>を鹿大教育学部の構内の金網室に自然状態で保存しその羽化脱出状況を調査した。テーダ松は指宿郡喜入地区及び鹿児島市谷山地区から8本採取した。樹令8~11年、樹高5~6m、胸高直径7~9cmのものを約1m<sup>3</sup>、黒松同様の金網室に入れて観察した。

B) 餌木による誘引調査は鹿児島市寺山地区の教育学部演習林で行なった。ここは海拔400mの台地で黒松の人工造林及び一部自然林で一時、松類穿孔虫の大発生を見たが、現在は小康を保っている地域である。餌木の設定には黒松の樹令13~23年、胸高直径12~15cmのものを50cmの玉切りにして、これを積み上げ総重量約60kg、材積0.07m<sup>3</sup>位とし上部は枝条をおうて乾燥を防いだ。これを3か所に設定して観察した。

III 調査結果と考察

A) 黒松では5月中旬より6月下旬まで羽化脱出が

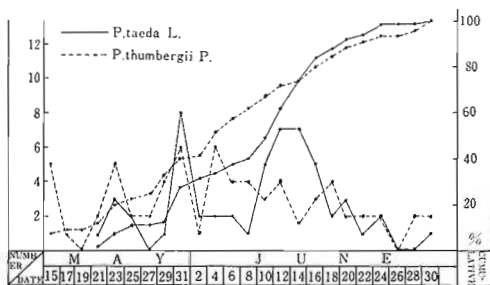


Fig. I Number and date of beetles (*Monochamus alternatus*) emerged from bait logs.

見られ、累積羽化率が50%を示す時期は6月上旬であった。性比は $\chi^2$ 検定の結果差異はなかった。被害木の穿孔孔数に対する脱出孔数は55~61%であった。テーダ松では5月下旬から6月下旬まで羽化脱出が見られ、累積羽化率50%を示す時期は6月上旬で黒松と差はなかった。穿孔孔数に対し脱出孔数は57~65%であった。性比の差がないのも黒松と同じであった。然し喰痕数はテーダ松の場合は明らかに多く、喰痕数に対する穿孔孔数は1/10以下で特に厚皮部では著しかった。またクロマツの穿孔孔と脱出孔との距離は平均61.1mm、脱出孔の直径は7.4mmに対し、テーダ松では穿孔孔と脱出孔の距離98.3mm、脱出孔の直径は8.5mmでやや大きかった。

B) 6月20日に設定した3か所の餌木に誘引されたものは39頭で、約30日間の長期に見られた。7月17日

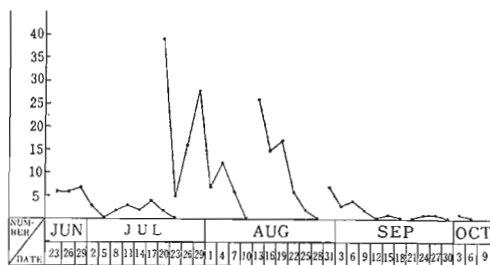


Fig. II Seasonal collected number of beetles (*Monochamus alternatus*) attracted by bait logs.

に設定したものは初日に37頭が誘引され21日間に113頭の多数にのぼった。8月10日設定のものは15日間に68頭の誘引が見られた。また8月28日に設定したものは9日間に2頭、9月30日に設定したものは僅か1頭にすぎなかった。従って餌木誘引の時期は7月中旬から8月中旬までの1か月位が最も有効と推定された。

IV 文 献

1. 片桐一正, 小島圭三, 越智鬼志夫, 宇賀正郎; マツノマダラカミキリの成虫の行動, げんせい 14, 1964

2. 石窪 繁；マツノマダラカミキリの個体飼育について，日本林学会九州支部講演集 21，1967

3. 石窪 繁，細山田三郎；カミキリムシ科の誘引調査について，日本林学会九州支部講演集25，1971